○豪華客船(船内のラウンジ)・昼過ぎ頃

ホーリー　「依頼があった。とある家の悪行を暴き、潰したい。と。
なんでも、依頼主の親族がその悪行に無理矢理巻き込まれ、命を奪われたらしい。その中には……まだ幼い子供もいたと。
我々は、ターゲットである家の当主と関わりを持ち、その悪行に取り込んでもらう」

ホーリー、一人掛けソファに座っている。
モンク、ホーリーの傍らに控えている。

ホーリー　「……というのが、今回の大まかな流れだよ」

モンク　「……で、その家の当主が参加していると教えられた船上パーティーにやってきたわけですが……見る限り、特に悪い空気も感じない。
明らかに普通のパーティーですね」

ホーリー　「そうだね。参加しているのは普通の貴族達ばかりだよ。
普通のパーティーで普通の貴族になりきり、普通の顔をして悪いことを考えているんだよ。我々と同じだね」

モンク　「……」

オータム　「ホーリー、モンク」

オータム、ホーリーとモンクの元へやってくる。

ホーリー　「……どうだった？」

オータム　「船の中央にあるイベントホールで、多くの貴族が催しの賭け事に参加していました。
その賭けで一定の金額まで勝つことが出来たら、特別な部屋に案内してもらえると」

モンク　「特別な部屋？」

オータム　「なんでも、高価な美術品が飾られているのだとか……。
その部屋への入場許可の印として、賭けに勝った貴族全員に船の紋章が入った指輪を渡していました」

モンク　「その部屋にある美術品を見る為に、皆賭け事を？」

ホーリー　「いや、違うよ」

モンク　「え？」

ホーリー　「賭け事というのは多くの金を手に入れられた者が勝つ。
賭ける金が多ければ、手に入る金も多い。
財力を持っている貴族程、賭け事では優位だ。
例え負けても、また金をつぎ込めばいいからね」

オータム　「そう。実際、宝石を受け取っていた者達は、名の知れた有名な家の貴族が多かった」

ホーリー　「財力を持つ者達が集まる場所。
これ以上に、交流を深め、取引や商売をするに打って付けの場所はない。
だから皆行きたがるんだよ」

モンク　「なるほど……皆考えることは同じということですか」

ホーリー　「そうだね。強い繋がりは様々なことに使えるから」

キャンサー　「あっ、見つけた」

キャンサーとボース、ホーリー・オータム・モンクの元にやってくる。

オータム　「随分と遅かったね」

キャンサー　「俺は広くて迷ってました」

ボース　「私はちょっとおしゃべりしてました」

キャンサー　「そこでばったり合流したんですよ、俺ら」

モンク　「おしゃべり……？」

オータム　「そうか。でも、無事全員合流しましたね」

ホーリー　「タイミングもよかった」

キャンサー　「タイミング？」

オータム　「そう。丁度僕が色々見て回ってきたところだったんだよ」

キャンサー　「あぁ、なるほど」

ボース　「それで？　この後はどうするんです？」

ホーリー　「指輪を手に入れないとね」

ボース　「指輪？」

オータム　「これからの行動として、ターゲットと接触する為に必要な指輪だよ。
特別な部屋に入る為の許可証が、どうやら船の紋章が入った指輪らしくてね……。その宝石を手に入れなければ、少々この後がやりづらくなる」

キャンサー　「あぁ……ここに来るまでに何人かいたけど、あれはそれか」

ボース　「どんな指輪なんですか？」

オータム　「シルバーのリングに、船の紋章が彫られた黒い宝石がはめ込まれたものだ。
デザインは全て統一されていた」

ボース　「……その指輪手に入れればいいんですか？」

オータム　「まぁ、そうだね。簡単に言えば」

ボース　「ふーん……」

ボース、他が会話をしている間にいつの間にかいなくなる。

ホーリー　「さて、どうしようか」

モンク　「僕らも賭けに参加しますか？」

オータム　「もう賭けは終わってしまったよ。残念ながら」

モンク　「え、じゃあ……」

キャンサー　「持ってるやつから奪って来ましょうか？」

ホーリー　「騒ぎが大きくなると、この後動きにくくなる可能性があるからね。
あまりお勧めはしないかな」

キャンサー　「あー、そっか……」

ボース、他が会話をしている間に黙って戻ってくる。

ボース　「まぁまぁキャンサー、指輪もちゃんとここにあるからさ。
そう落ち込まないで」

ボース、キャンサーの肩を叩き指輪を見せる。

キャンサー　「おぉサンキュー……は？」

ホーリー　「……」

オータム　「……」

モンク　「……」

ボース　「はい。二つくらいあれば、なんとかなりますよね」

ボース、オータムに二つの宝石を渡す。

モンク　「え……？！　いつの間に……！」

ボース　「さっきそこにいたお姉さん達とちょっとおしゃべりして貰った」

ホーリー　「相変わらず手が早いね」

オータム　「おー……さすがだね。ありがとう」

ボース　「いえいえ、お礼はさっきのお姉さん達に言わなきゃ」

キャンサー　「人たらし」

ボース　「社交的って言って」

ホーリー　「まぁ、何はともあれ、これで接触できそうだ」

オータム　「はい」

モンク　「そうですね」

ボース　「二つしかないですけど……」

ホーリー　「では、私とボースで行こう」

ボース　「え、私でいいんですか？」

ホーリー　「そういう場所でこそ、君の社交性はとても生かせるからね」

ホーリー、片方の指輪をボースへ差し出す。

ボース　「……確かに、そうですね。わかりました。お役に立ちます」

ボース、ホーリーから差し出された指輪を受け取る。

ホーリー　「そういうことだから、いいね」

モンク　「はい」

オータム　「わかりました」

キャンサー　「じゃあ、俺は美味いもの食べてきます」

ボース　「バカ。仕事に使えるもの、なんでもいいから探すんだよ。情報でも人脈でも」

キャンサー　「はーい」

オータム　「では、そういうことで」

ホーリー　「我々の目的がバレないようにね」

キャンサー　「もちろんです。ホームズにも悟らせません」

モンク　「ホームズ？」

ボース　「ホームズって、シャーロック・ホームズ？　なに急に」

キャンサー　「俺らみたいなのが裏で色々やってると、表ではそういうのが俺らの事探るんだよ」

ボース　「私達の反対が、ホームズってこと？　小説じゃん」

キャンサー　「わかんないだろ？　本物のホームズじゃなくても、『みたい』なのがいるかもだし？」

ホーリー　「（微笑む）」

ホーリー、微笑んだ後セリフと同時に立ち上がる。

ホーリー　「では、そのホームズに謎解きをさせないように、我々は暗躍するとしようか」

皆がホーリーへ視線を向けながら頷く。